

第三章 神の永遠のご計画について

第五節（一）「神の救いのご計画は歴史の中で実現する」

はじめに

皆さん、こんにちは。前回まで、第三章第四節を学びました。そこでは、神の選びとは、人を区別して優越感を与えるための教えではなく、神が世界を救うためにご自身の民を召されるという、救いの歴史の中で理解すべき教えであることを学びました。神はアブラハムを選ばれ、イスラエルを選ばれ、十二使徒を選ばれ、そして教会を選び、世界へ遣わされます。選びは、神の救いの歴史を前進させる神の恵みの御業です。今日の第五節では、その選びが、召命、義認、子とされること、聖化、信仰による保持、栄化という一連の恵みとして歴史の中に現れることを学びます。

さて、第五節では、神が永遠の昔に定められた救いが、**歴史の中で実際に人間の上にどのように実現していくのか**を扱います。神のご計画は、天に秘められた抽象的な理念ではありません。神は歴史の中で働き、人を召し、御言葉を語り、信仰を与え、最後まで導いてくださいます。つまり第五節は、永遠のご計画が、キリストにあって、私たちの具体的な救いの歩みとして実現することを教えているのです。

一 神は永遠に定めるだけではありません

第三章第一節以来、私たちは繰り返し「永遠のご計画」という言葉を学んできました。しかし、ここで一つ誤解を避けなければなりません。神は計画だけを立てて、あとは世界がその通りに動くのを眺めておられるお方ではありません。聖書の神は、生きて働かれる神です。創世記を読むと、神はアブラハムに語りかけられます。モーセを燃える柴の中から召されます。サムエルに夜の静けさの中で呼びかけられます。イザヤを神殿で召命されます。そして時が満ちると、御子イエス・キリストをこの世界へ遣わされます。神は、ご自身のご計画を歴史の中で一つ一つ実現していかれるお方です。ですから第五節は、第一節で語られた「神の予定」が、選ばれた者への具体的な救いの働きとしてどのように実行されるのかを語っています。

二 救いは神の働きによって始まります

私たちは信仰について考えるとき、「私が神を信じた」という言い方をよくします。もちろん、それは間違いではありません。私たちは確かに信じます。しかし聖書は、それよりもさらに深いところを語っています。ヨハネによる福音書では、イエスが弟子たちにこう言われました。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」(ヨハネ 15・16)

また、ヨハネによる福音書六章では、「父がお与えにならなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない」とも語られています（ヨハネ 6・65）。これらの御言葉は、人間の信仰を否定しているのではありません。むしろ、その信仰の始まりにも神の恵みがあることを教えています。信仰は、人間が神へ向かって伸ばした最初の手ではありません。神が私たちへ差し伸べてくださった御手への応答なのです。

三 神の召しは人格への呼びかけです

ここで注意したいことがあります。神は人間を機械のように動かされるものではありません。聖書の神は、人格をもったお方として人格に語りかけられます。アブラハムに対しても、「あなたは生まれ故郷を離れなさい」と命じられました。モーセにも「さあ、行きなさい」と語られました。マリアには「恐れることはない」と言われました。ペトロには「わたしに従いなさい」と招かれました。神は命令されるだけではありません。約束を与え、慰めを与え、忍耐深く導かれます。ですから、第五節が語る神の召しは、運命のような力ではありません。人格と人格との交わりの始まりなのです。ここにも、第一章で学んだ「第二原因」の教えが生きています。神はすべてを主権的に導かれますが、その導きは人間の人格や意思を消し去るものではありません。聖霊によって心を開き、御言葉によって信仰へと導き、ご自身との生きた交わりへ招かれるのです。

四 神のご計画は「キリストにあって」実現します

ここで、第五節の最も重要な言葉に目を向けたいと思います。それは「キリストによって（あるいは、キリストにあって）」という表現です。これは、ウェストミンスター信仰告白全体を貫く重要な神学です。神は永遠の昔から救いを定められました。しかし、その救いは決して抽象的な理念ではありません。また、人間がそれぞれ独自に神へ近づいていく道でもありません。神は、一人の御子イエス・キリストを通して、ご自身の救いを実現されます。パウロはエフェソの信徒への手紙で、「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」（エフェソ 1・4）と語っています。ここで注意したいのは、「選び」がまず語られ、そのあとに「キリスト」が付け加えられているのではないということです。パウロは最初から「キリストにおいて選ばれた」と言っています。つまり、キリストは神の救済計画の「手段」ではありません。神の救済計画そのものの中心です。私たちは、予定論をキリストから切り離して考えることはできません。カルヴァンも『キリスト教綱要』の中で、「キリストの外に予定を求めてはならない」と繰り返し語っています。これは非常に大切な言葉です。神の隠されたご計画を推し量ろうとするのではなく、神が私たちに示してくださったキリストを見ること。そこに、信仰者の平安があります。

五 神は歴史の中で人を召されます

神の救いは、歴史の中で実現します。ですから、神は一人ひとりを、それぞれ異なる時と場所で召されます。アブラハムには七十五歳の時に語りかけられました。モーセは八十歳になってから召命を受けました。少年サムエルは神殿で神の声を聞きました。ダビデは羊飼いの少年でした。アモスは預言者の家系ではなく、羊飼いであり、いちじく桑を栽培する農夫でした。ペトロやアンデレは漁師でした。徴税人レビは収税所で召されました。パウロはダマスコ途上で復活の主に出会いました。このように聖書を読むと、神の召しには共通の型がありません。神は、それぞれの人生の歩みの中で、一人ひとりに語りかけておられます。だから私たちは、自分の信仰生活を他人と比較する必要はありません。召された時期も違えば、歩み方も違います。しかし、その背後で働いておられる神は同じです。このことは、教会生活において大きな慰めになります。ある人は幼い頃から教会に導かれます。ある人は人生の苦しみの中で初めて神を知ります。ある人は晩年になって洗礼を受けます。神は、それぞれの歩みをご存じであり、ご自身の時に召してくださるのです。

六 神の召しは教会を通して与えられます

ここで忘れてならないことがあります。神は特別な仕方で人を召されることもありますが、通常は**教会を通して**働かれます。パウロはローマ書十章で「宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができるでしょう」と言っています（ローマ 10・14）。神は御言葉を用いられます。説教を用いられます。洗礼と聖餐という聖礼典を用いられます。信仰者の証しを用いられます。つまり、神は教会を、ご自身の救いの御業に参加させてくださるのです。ここでも第三章第四節とのつながりが見えてきます。教会は選ばれた共同体であると同時に、神の召しを世界へ届ける共同体でもあります。それゆえ、教会は自らのためだけに存在することはできません。御言葉を語り、福音を証しし、隣人に仕えることを通して、神の救いのご計画に参加するよう召されているのです。この点で、ウェストミンスター信仰告白の教会理解は、改革派教会の宣教理解の土台ともなっています。

七 救いは一つの恵みの働きです

第五節を読むと、神は選ばれた者を、召し、義とし、子とし、聖化し、信仰によって守り、最後には栄光へと導かれる、という順序で語られています。改革派神学では、これを「救いの秩序」と呼びます。しかし、この言葉だけが独り歩きすると、あたかも神が段階ごとに機械的な手続きを進めておられるような印象を与えかねません。聖書が語る救いは、そのようなものではありません。一人の人が神と出会い、生涯を通して神に導かれ、ついには神のみもとへ迎えられる、その**人格的な歩み**です。その歩みを支えているのは、最初から最後まで神の恵みです。パウロはフィリピの信徒への手紙でこう語っています。「あなたがたの中で善い業を始められた方は、それを完成の日までに成し遂げてくださると、わたしは確信しています」（フィリピ 1・6）。この御言葉は、第五節全体を要約していると

言ってもよいでしょう。神は始められた救いを途中で放棄されることはありません。完成へと導かれるのです。

八 召しから栄光までを導かれる神

この流れを最も美しくまとめているのが、ローマの信徒への手紙八章です。パウロはこう語ります。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものとしようとあらかじめ定められました。あらかじめ定められた者たちを更に召し、召された者たちを義とし、義とされた者たちには更に栄光をお与えになりました」(ローマ 8・29～30)。ここには第五節の骨格があります。予定。召命。義認。そして栄光。しかし、ここでも重要なのは、それぞれを別々の教理として理解することではありません。すべての中心には、神が私たちが御子の姿に似た者へ造り変えてくださるという目的があります。神の救いは、罪の赦しだけで終わりません。赦された者をキリストのかたちへと新しくしていく働きでもあります。ここに、聖化の意味があります。

九 救いとは神との交わりの回復です

救いという言葉を見ると、多くの人は「死んだ後に天国へ行くこと」と考えます。もちろん、それも救いの大切な一面です。しかし聖書が語る救いは、それよりもはるかに豊かです。創世記を見ると、人間は神との交わりの中に造られました。夕暮れになると、神は園を歩まれ、人は神と共にいました。ところが罪によって、その交わりは失われます。聖書全体は、この失われた交わりを神が回復してくださる物語です。イエス・キリストにおいて神は人となり、私たちの間に住まわれました。十字架によって隔ての壁を取り除き、復活によって新しい命を与えられました。そして聖霊によって、今日も私たちをご自身との交わりへ招いておられます。ですから第五節で語られている救いとは、単なる法律的な宣言ではありません。神との新しい交わりの始まりなのです。

十 神は最後まで守り抜かれます

第五節は、信仰者に大きな慰めを与えます。なぜなら、救いは神が最後まで完成してくださるからです。私たちは弱い者です。失敗もします。時には信仰が揺らぐこともあります。しかし、だからといって神の真実が変わることはありません。イエスはヨハネによる福音書でこう約束されました。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」(ヨハネ 10・27～28)。ここに改革派教会が大切にしてきた信仰の慰めがあります。救いは、私たちが神をしっかり握っていることにかかっているではありません。神が私たちを決して離さないことにかかっています。この確信があるからこそ、信仰者は試練の中でも希望を失わずに歩み続けることができます。

歴史神学コラム

「救いの秩序」は一枚の地図です

改革派神学では、「召命」「義認」「聖化」「栄化」などを区別して学びます。これは神の働きを細かく分けるためではありません。旅人が地図を見て道筋を理解するように、神が救いをどのように完成されるのかを整理して理解するためです。ジョン・カルヴァンも『キリスト教綱要』第三巻では、キリストの御業が**聖霊によって私たちにどのように適用されるか**を順序立てて説明しています。しかし彼は、それぞれを切り離された出来事としてではなく、キリストとの結合（*unio cum Christo*）という一つの恵みの中で理解しました。この点は、後の改革派神学においても重要な原則として受け継がれています。

十一 神の救いは決して途中で終わりません

第五節の最後まで読んで、私たちは一つのことに気づきます。神の救いは、最初から最後まで神ご自身の御業であるということです。神は永遠の昔から救いを定められました。時が来ると御子を遣わされました。御言葉によって人を召されます。聖霊によって信仰を与えられます。義としてくださいます。神の子として迎えてくださいます。日々、聖なる者へと造り変えてくださいます。そして最後には、ご自身の栄光にあずからせてくださいます。このように見てくると、信仰者の人生は、偶然の積み重ねではありません。神の恵みの歴史です。もちろん、その道には苦しみもあります。失敗もあります。涙もあります。しかし、そのすべてを貫いているのは、**神の変わる事のない真実**です。

十二 救いは契約の神の誠実さに支えられています

ここで、**契約**という視点を改めて加えておきたいと思います。第五節が語る救いの確かさは、契約神学を抜きにして読むと十分に見えてきません。神はアブラハムと契約を結ばれました。シナイでイスラエルと契約を結ばれました。ダビデと契約を結ばれました。そしてイエス・キリストにおいて、新しい契約を確立してくださいました。契約とは、神がご自身を人に結びつけられる約束です。そして、その契約に忠実なのは、まず神です。私たちは契約を破ります。しかし神は、ご自身の約束を決して取り消されません。だから第五節が語る救いの確かさは、私たちの信仰の強さではなく、**契約に忠実な神の誠実さ**に根ざしているのです。このことは、改革派神学が一貫して語ってきた大切な慰めです。

十三 キリストとの一致こそ救いの中心です

ここで、もう一度最も大切なことに戻しましょう。第五節には、召命、義認、子とされること、聖化、栄化など、多くの救いの恵みが語られています。しかし、それらは互いに独立した恵みではありません。すべては、**キリストとの一致**という一つの恵みから流れ出ています。パウロは、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたし

の内に生きておられるのです」(ガラテヤ 2・20)と語ります。また、「もしキリストと結ばれるなら、新しい創造なのです」(Ⅱコリント 5・17)とも語っています。ここで大切なのは、キリストとの一致が、救いの出発点であるだけでなく、義認、子とされること、聖化、栄化を一つに結び合わせる中心であるということです。カルヴァンが『キリスト教綱要』で繰り返し語った「キリストとの結合 (unio cum Christo)」という思想は、まさにこの第五節が語ろうとしている内容をよく表しています。

十四 予定論は希望を語る教理です

第三章全体を読み終えようとしている今、改めて確認したいことがあります。予定論は、恐れるための教理ではありません。誰が救われ、誰が救われないのかを詮索するための教理でもありません。それは、**神がご自身の救いを最後まで完成してくださるという希望の教理**です。私たちが神を握りしめているわけではありません。神が私たちを握ってくださいています。私たちが神に忠実なのではありません。まず神が契約に忠実でいてくださいます。その神の恵みによって、私たちは今日も信仰の道を歩むことが許されています。だから改革者たちは、この教理を学んだあと、人間の知識を誇るのではなく、「ただ神にのみ栄光あれ」と告白したのでした。

歴史神学コラム

カルヴァンが最後に語ったのは「安心」でした

カルヴァンの予定論は、ときに厳しい教理として理解されることがあります。しかし、『キリスト教綱要』を最後まで読むと、カルヴァンが信徒に与えたかったものは**恐れ**ではなく、**確信と慰め**であったことが分かります。彼は、人間は自分自身を見つめれば、信仰の弱さと罪深さに絶望せざるを得ないと考えました。だからこそ視線を自分ではなくキリストへ向けるよう勧めます。キリストにある者は、神の愛から引き離されることはありません。この牧会的な配慮は、ウェストミンスター信仰告白にも受け継がれています。予定論は、神学者だけの議論ではありません。苦しみの中にある信徒を支え、神の約束への信頼を新たにするための教理なのです。

第三章第五節のまとめ

第三章第五節は、第三章全体の結論へ向かう重要な節です。ここまで学んできたことを振り返ると、神は永遠の昔から救いのご計画を定め、そのご計画を歴史の中で着実に実現しておられることが分かります。その中心には、常に**イエス・キリスト**がおられます。神は、キリストによって人を召し、義とし、聖なる者とし、最後まで守り抜き、ご自身の栄光にあずかせてくださいます。ですから、第三章全体が私たちに語りかけているのは、人間の運命についての思索ではありません。それは、**契約に真実であられる神への信頼**です。

この神を知るとき、私たちは恐れからではなく、感謝と礼拝のうちに歩む者とされるのです。

第六節（一）「予定の教理は信仰者にどのような実りをもたらすのか」

これまで私たちは、神の永遠のご計画について学んできました。第一節では、その計画が神の永遠の御旨に基づくことを、第二節では、人間の行いや功績ではなく神の自由な恵みによることを学びました。第三節から第五節では、その計画がキリストにおいて実現し、神が選ばれた者を召し、義とし、聖なる者とし、最後まで導かれることを見てきました。第六節では、これらの教えをどのような態度で受け止め、どのように生きるべきかが語られます。予定という教理を知った者は、どのように生きるのでしょうか。これが第六節の問いです。

一 予定の教理は知識ではなく信仰の糧です

改革派教会は、予定論を大切にしてきました。しかし、それは神学的な知識を増やすためではありません。まして、自分の理解の正しさを誇るためでもありません。信仰告白は、この教理が信仰者に**慰め・感謝・励まし・礼拝**をもたらすことを教えています。ここで私たちは、ローマ書八章を思い起こします。パウロは予定について語ったあと、「では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」（ローマ 8・31）と語ります。さらに、「わたしは確信しています」（ローマ 8・38）と続けます。予定論の結論は、不安ではありません。**確信**なのです。

二 信仰者は神の御心を詮索するためではなく、御言葉に従うために生きます

予定論について学ぶと、人はしばしば、「自分は選ばれているのだろうか」「救われない人は誰なのだろうか」という問いへ向かいます。しかし、信仰告白はそのような問いへ私たちを導こうとはしていません。神が明らかにしておられないことは、神の御手の中にあります。私たちに与えられているのは、福音です。カルヴァンは、『キリスト教綱要』の中で、神の隠された御旨をのぞき込もうとすることを戒めています。私たちが見るべきなのは、神の秘められたご計画ではありません。**十字架につけられ、復活されたイエス・キリスト**です。そこに神の救いの御心は明らかにされています。ですから、信仰者は神の秘密を知ろうとする者ではなく、神が語られた御言葉に聞き従う者なのです。

三 予定の教理は礼拝へと導きます

第三章全体を振り返ると、最後に残るのは「神はなんと偉大なお方であるか」という驚きです。人間の知恵では測ることのできない神のご計画。歴史を貫いて働かれる神の真実。キリストにおいて実現した救い。そして聖霊によって今日も続いている神の導き。これら

を思うとき、私たちはパウロとともに、「ああ、神の富と知恵と知識とのなんと深いことか」（ローマ 11・33）と賛美せずにはられません。予定論は、議論を終わらせるための教理ではありません。**礼拝を始めるための教理**なのです。神を知れば知るほど、私たちは神の前にへりくだります。そして、その恵みを感謝しながら歩む者とされていきます。

四 予定の教理は謙遜を生みます

第三章第六節でまず教えられていることは、この教理は人を高慢にするためではなく、**謙遜へ導く**ということです。もし私たちが救われたことを、自分の決断や信仰の強さ、自分の人格や努力によるものだと考えるなら、知らず知らずのうちに他人と比較し、自分を誇るようになります。しかし、第三章をここまで読んできた私たちは、そのようには考えません。神が私たちを召してくださいました。神が信仰を与えてくださいました。神が義としてください、子として迎えてくださいました。神が今日まで支えてくださっています。そして、神が最後まで導いてくださいます。このように考えるとき、私たちは自分を誇ることができません。パウロはコリントの教会に向かって、「あなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか。もしいただいたのなら、なぜいただかなかったような顔をして誇るのですか」（I コリント 4・7）と語っています。改革派教会は予定論を大切にしてきましたが、それは改革派教会が優れているからではありません。むしろ、「**すべては恵みによる**」ということを忘れないためでした。予定論が高慢を生み出したなら、それは予定論を誤って理解していることになります。

五 予定の教理は感謝を生みます

謙遜とともに、この教理は**深い感謝**を生み出します。エフェソの信徒への手紙の第一章を読むと、パウロは神の予定を語りながら、何度も「神の栄光をたたえるためです」と繰り返しています。予定論は感謝の神学です。自分が神を見いだしたのではなく、神が私を見いだしてくださいました。私が神を愛したのではなく、神がまず私を愛してくださいました。ヨハネの手紙には、「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださいましたからです」（I ヨハネ 4・19）とあります。この御言葉は、予定論の中心をよく表しています。神の愛が先にあります。だから私たちの応答があります。この順序が入れ替わると、福音は福音ではなくなってしまいます。

六 予定の教理は祈りを生みます

さらに、この教理は祈ることを教えます。時々、「すべて神がお決めになっているなら、祈っても意味がないのではないか」という質問を受けることがあります。しかし聖書は、そのようには教えていません。神は結果だけでなく、**その結果に至る道も定めておられる**からです。神は祈りを用いられます。説教を用いられます。教会を用いられます。信徒の証しを用いられます。ヤコブは、「義人の祈りは、大きな力があり、効果があります」

(ヤコブ 5・16) と語っています。祈りは神の予定に反対する行為ではありません。神の御業に参加する恵みなのです。だから改革派教会は予定論を信じると同時に、祈る教会でもありました。カルヴァンはジュネーヴで毎日のように祈りをささげ、説教を続けました。予定論は決して信仰者を受け身にはしません。むしろ、神への信頼をもって大胆に祈る者へと変えていくのです。

歴史神学コラム

日本キリスト改革派教会と「予定についての信仰の宣言」

日本キリスト改革派教会は、創立五十周年を記念して「予定についての信仰の宣言」を公にしました。その背景には、予定論がしばしば誤解され、「冷たい教理」「宿命論」「伝道を妨げる思想」と受け止められてきたという事情がありました。この宣言は、そのような誤解を正し、予定とは**神の恵みへの信頼を新たにし、教会を感謝と宣教へと導く教え**であることを改めて確認しています。この点で、この宣言はウェストミンスター信仰告白第三章第六節の精神を、現代の日本の教会に向けて言い表したものと理解することができます。

七 予定の教理は伝道を弱めるのでしょうか

改革派教会は昔から、「予定を信じるなら、伝道する必要はないではないか」という批判を受けてきました。しかし、それは予定論に対する大きな誤解です。使徒パウロほど神の予定を深く語った人物はいません。ローマ書九章から十一章は、その代表的な箇所です。しかし、そのパウロは同時に、誰よりも熱心な宣教師でした。幾度も船旅をし、迫害を受け、牢に入れられながらも福音を語り続けました。もし予定論が伝道を妨げる教えであるなら、パウロの生涯を説明することはできません。神は救いの目的だけでなく、その目的を実現する手段も定めておられます。その手段の中心が、福音の宣教です。ローマ書十章でパウロは、「信仰は聞くことにより、しかも聞くことはキリストの言葉によるのです」(ローマ 10・17) と語ります。神は御言葉を通して人を召されます。だから教会は語ります。予定を信じるからこそ、安心して福音を宣べ伝えることができるのです。結果は私たちの能力ではなく、神の御手に委ねられているからです。

八 予定の教理は希望を生みます

第六節の最後に至ると、予定論は未来への希望として響いてきます。私たちは世界を見るとき、多くの不安を覚えます。戦争があります。貧困があります。教会の衰退を目にすることもあります。日本の教会も決して容易な状況にはありません。しかし、第三章が教えているのは、歴史の主人は人間ではなく神である、ということです。神は創造の初めから終わりまで歴史を導いておられます。だから教会は絶望しません。希望は人間の可能性にあるわけではありません。神の真実にあります。この確信があったからこそ、宗教改革者た

ちは困難な時代にも福音を語り続けました。この確信があったからこそ、日本キリスト改革派教会も戦後の困難な時代に教会を建て上げ、宣教を続けてきました。私たちもまた、その信仰を受け継ぐ者として歩みたいと思います。

九 予定論の最後にあるもの

第三章を最後まで読み終えると、一つのことが見えてきます。予定論が私たちを導くのは、「**神は信頼できるお方である**」という信仰です。神は約束を忘れず、契約に忠実であり、御子を惜しまず、聖霊を遣わしてくださいました。そして、ご自身が始められた救いを最後まで完成してくださいます。だから私たちは、自分の弱さではなく、神の真実に希望を置いて歩むことができます。これがウェストミンスター信仰告白第三章全体の結論です。

歴史神学コラム カルヴァンから日本キリスト改革派教会へ

カルヴァンは予定論を論じるとき、最後には必ず信仰者の慰めへと話を戻しました。十七世紀のウェストミンスター信仰告白も、この伝統を受け継ぎ、「予定の教理は慎重に、敬虔に取り扱われるべきである」と語ります。さらに日本キリスト改革派教会は、創立五十周年記念の「予定についての信仰の宣言」において、この教理は神の恵みへの感謝を深め、福音宣教への励ましを与えるものであることを改めて告白しました。このように見えてくると、予定論は時代ごとに新しい意味へ変えられてきたのではありません。その中心にある「神の恵みへの信頼」という福音は、カルヴァンからウェストミンスター信仰告白へ、そして日本の改革派教会へと、一貫して受け継がれてきたのです。

第三章は「神の永遠のご計画」について語る章です。しかし、それは決して冷たい運命論ではありません。神は永遠の昔から、キリストにおいて世界を救おうと定められました。そのご計画は歴史の中で実現し、今日も教会を通して前進しています。そして終わりの日には、神の栄光が完全に現されます。ですから、予定論とは未来を恐れる教理ではなく、**未来を神に委ねて歩む信仰**です。その信仰に立つとき、私たちは謙遜に神を礼拝し、感謝をもって隣人に仕え、希望をもって福音を証しする者とされます。